

研究紀要

第27号

土偶研究とジェンダー考古学（II）

小野美代子

古墳時代における木製品出土状況の解釈

山本 靖

川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（1）

福田 聖

赤熊 浩一

岡本 千里

澤口 美穂

大屋 道則

模倣坯の製作工程

大屋 道則

岡本 千里

埼玉県内横穴式石室の事例集成

青木 弘

2013

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

- 土偶研究とジェンダー考古学（II） 小野美代子（1）
- 古墳時代における木製品出土状況の解釈 山本 靖（17）
- 川越田遺跡の手捏ね土器と祭祀（1）
福田 聖 赤熊浩一 岡本千里 澤口美穂 大屋道則（33）
- 模倣坯の製作工程 大屋道則 岡本千里（69）
- 埼玉県内横穴式石室の事例集成 青木 弘（79）

土偶研究とジェンダー考古学（II）

小野美代子

要旨 考古学は、物的証拠に基づいて過去の社会を研究する学問である。また、先史考古学に限って言えば、物的証拠のみから過去の社会を研究せざるを得ない学問であると言える。物的証拠は、各種の遺構や遺物及びそれらの分析データなどから構成される。したがって、今日まで偶然遭ったか、遭ったものから復元されたデータでしかない。また、昨今の発掘調査事情では、よほど幸運な場合を除き、過去の人々の生活域全体の痕跡を明らかにできる状況にはない。実際は、遺跡として周知される範囲の一部分のみを調査する場合が多く、生活域(集落)の全貌が明らかになることは皆無と言っても差支えないであろう。多くの場合、遺跡の部分的な調査で明らかになった事象から過去の社会に言及せざるを得ないのが現実である。

ところで、先史考古学の研究対象のひとつで、その形状や出土状況などから研究者の数だけ解釈があると言っても差支えない「土偶」について、ジェンダー考古学的視点で何らかの考察をすることが、いかに困難であるかは十分承知している。しかし、あえてこのようなテーマを選んだ訳は、ジェンダー考古学的視点で土偶を解釈した際に想定される問題点を改めて提起し、「人体を模った資料」ゆえに生じる「解釈の偏り」について考察を加えたいと考えたためである。また、安易に土偶や女性像にジェンダー考古学的な解釈を当てはめている論考が見受けられることも、その理由の一つであり、ジェンダー考古学的視点で土偶を解釈した際に想定される問題点の提起である。

1 はじめに

我が国で「Gender」という概念が意識されだしたのは、1970年代の末頃からである。以来、ジェンダーは「社会的・文化的に形成された性差」という意味に訳され、社会学や女性学、女性史の分野で多く使用され、論議されてきていることは前稿でも触れた。また、「考古学とジェンダー」に関する文献探しを始めたところ、岡山大学を中心としたグループ以外に「ジェンダー考古学」に取り組んでいる所が無いことにも触れた(小野2011)。さらに、女性研究者の理解者であるような考察をしながら、自身の「ジェンダー・バイアス」に全く気付いていない男性研究者の存在や詳細な検討を経ずに、土偶や女性像を安易に「ジェンダー考古学」の考察に使用している論考も見受けられる。前稿で、井川史子(F-Ikawa 2002) やマーガレット・エーレンバーグ(M-Ehrenberg 1997) の論文を引用したのは、縄文土偶の研究史をひもとき

ながら、安易に「ジェンダー考古学」に結びつける井川や、ジェンダー考古学的視点の重要性を論じながら、考古資料の解釈には至って慎重なエーレンバーグの研究姿勢に学ぶところが多かったからに他ならない。特に、エーレンバーグは、後期旧石器時代から青銅器時代にかけて作られた「小像」の解説で、「像そのものを見直すこと」、「母神への信仰を証明する証拠を熟考することの必要性」、さらに、「希少ながら存在する男性像を除いて女性像だけを考察の対象にしてきた結果、先史ヨーロッパを通じて人々に崇められ、偶像として表現される母神(Mother Goddess)」という考えが出来上がったことなどに繰り返し触れ、ヴィーナス像を単純に女性の身分と関連づけることに警鐘を鳴らしている。

研究者が自重すべきは、ジェンダー・バイアスの過去への投影や民族事例などの「安易で偏った借用と解釈」をもとに、「そうであったかもしれ

ないが、確証のない事例について、まるでわかつたような幻想」をまき散らすことなのではないだろうか。考古学研究に必要なのは、物的証拠の熟考と実証的な証明の重要性である。すべての偏見から自由になり、過去の社会を探求することが重要で「土偶の研究」も例外ではあり得ない。前稿では、我が国のジェンダー考古学研究の現状と井川やエーレンバーグの論考を紹介しながら、先史時代研究に「ジェンダー考古学」の視点を取り入れる際の問題点について概観した。本稿では、具体的な土偶及び研究に触れながら「土偶研究とジェンダー考古学」について論考を加えたい。

2 土偶研究の現状

ここでは、土偶の機能や役割に関するものを中心に研究史を概観したい。我が国で、土偶に関する最初の記載が見られるのは、元和9年（1623）に編纂された津軽藩の『永禄日記』である。また、寛政11年（1799）に著された泰樟丸の『蝦夷島奇観』には北海道函館村當別付近で発見された土偶の図が、文化・文政年間（1800年代前半）に著された『耽奇漫録』には、「津軽亀ヶ岡にて掘出たる土偶人二幅」という記述などが見られ、一部では、その存在が明治以前より知られていたことがわかる（江坂1960より）。

明治時代の土偶研究は、坪井正五郎等を中心に発足した人類学会誌上に見られる。明治19年、白井光太郎が「人類学会報告第1巻2号」に発表した「貝塚より出し土偶の考」が最初のものである（白井1886）。白井は、土偶の年代を石器時代にものと限定し、その用途について「①小児の玩弄物に製しか、②神像と為し祭りしか、③装飾と為し之を帶しか」とし、自身は装飾品説をとり、坪井が「服飾にして或は護身牌を兼ねし」ものかと追記している。その後、若林勝邦が「貝塚土偶ニ就テ」（若林1891）で、既知の土偶34点を①内部空虚で、装飾密、全形大なる土偶、②内部充実

して扁平、装飾省略せられ全形小なる土偶、③顔面部分のみのものの3類に分類している（註1）。大野延太郎は、明治30年に「土偶ト土版トノ関係」（大野1897）を著し、その後明治34年までに土偶と土版・岩版に関する考察をいくつか著している（註2）。明治31年、坪井は「貝塚土偶の男女」（坪井1898）を著し、土偶の表現に男女の差があることを指摘し（註3）、明治43年には大野が「土偶の形式分類に就て」（大野1910）で、287点の土偶について、地域差を考慮に入れ15類に分類し、さらに「男子を表現したもの47点・女子を表現したもの213点・不明なもの27点」と女子を表現したものが圧倒的に多いことから、「女神即妊婦の崇拜する安産の守神とでも云ふような譯であろうと推察が下される」とし、土偶の有鬚無鬚について再考が必要であると述べている（註4）。

大正11年には鳥居龍蔵が「日本石器時代民衆の女神信仰」（鳥居1922）で、土偶が男性像よりも女性像が圧倒的に多いことを理由に、「當時彼等の間に盛に女神信仰の行はれた結果、斬く多数なる女形が、土偶や他の物に表現せらるるに至ったことと思はれます。」とし、土版や顔面把手なども女神を表現したものとしている。また、「乳房を甚だしく突起させ、腹部を頗る肥満せしめ、また或者には陰部さへも現はれ居るので、何物かのシンボルであることが知れます。」と述べ、ヨーロッパの女神像例を紹介し、日本の石器時代民衆に地母神信仰があり、女子の手によって土器や土偶、土版などの製品が作られ、シャーマン巫覶としての女性の存在を考察している。このような見解の是非はともかく、鳥居の論考は石器時代における土偶や土版等の在り方について体系的に考察を加えた最初のものである。その後、土偶研究は、坪井の所謂「遮光器説」への賛否などを経（註5）、大正15年に、谷川磐雄が「土偶に関する二・三の考察」（谷川1926）で、土器形式との対応を試み、用途についても「石器時代民衆が呪物と

して各人或は各部落が随意に製作し、崇拝し、携帯したものであろう」と指摘し、破損した状態で発見される土偶について「石器時代民衆の靈魂觀は、所謂 Animism の時代であり、土偶も完全なもののはよく靈力を憑らしめて magic として役立つが、一旦破損すればその能力を消失して、土器の破片と同一視せられ、貝塚に放棄されるに至ったものであろう」という見解を示している。谷川の「土偶は各人、各部落が随意に製作し、崇拝し、携帯した…」とする考え方や「一旦破損すればその能力を消失し、土器の破片と同一視され…」という指摘は、その後の土偶研究の方向性に大きな意義を与えるものであったといえる。

昭和初期の土偶研究は、甲野勇や中谷治宇二郎、山内清男などにより形態や分布、あるいは土器型式に基づいた分類が行われ、これらの研究が主流を占める（註6）。昭和14年には八幡一郎が「日本先史人の信仰の問題」（八幡1939）を著し、土偶の特殊な出土状態に着目するとともに、「土偶の形式を調査し、形式の歴史的序列と地理的分布を吟味し土偶の変遷並びに文化圏との関係を極めることで、土偶本来の姿を求めることが可能になる」として、鳥居の「女神信仰説」等を批判している。甲野勇は、昭和14年の「容器的特徴を有する特殊土偶」、翌15年の「土偶型容器に関する一二の考察」（甲野1939、1940）で、空洞で徳利状をした土偶を取り上げ、「容器的形態を有し、小兒骨を入れるためのものと考えられること、縄文時代最終末期の彌生的色彩の濃厚なもの」を、土偶というよりは「土偶型容器」とすることが適切であろうとしている。昭和18年には中島壽雄が「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」（中島1943）で、東大人類学教室所蔵土偶の観察に基づき、胸部及び腹部が観察できる土偶110点中の約8割が女性としての特徴を有し、男性土偶と断定できるものが一例も無いことから「本邦石器時代土偶は、或は歐州旧

石器時代後期の Venus 像と関連を持つものではあるまいか」と解釈している。昭和23年には吉田格により縄文早期花輪台式に伴う土偶が紹介され（吉田1948）、翌24年には田邊義一によりアスファルトで修復された土偶の存在が報告される（田邊1949）。さらに昭和29年には山崎義男の「群馬県郷原出土土偶について」（山崎1954）や江坂輝彌による「山形県飽海郡藤岡村杉沢発見の大洞C2式の土偶の出土状態について」（酒井・江坂1954）などが報告され、特殊な遺構から出土する土偶が注目されはじめる。昭和30年代には土偶の集大成や概説書が目立つ。昭和35年に出版された江坂輝彌の『土偶』（江坂1960）は、全国に分布する土偶を時期ごと地域ごとに分類を試みた大著で、「土偶はすべて女性か」という項目を設け、土偶の多くが「乳房は大きく、臀部も後方へ大きくふくらみをもたせ、下腹部もまろやかなシルエットを見せ、股部に、はっきりと女性の性器を刻んだ」ものもあること、また、縄文時代の土偶には女性像が多いことは古くから指摘されていること、縄文時代の土偶に男性像として意識的に作られたものは、ほとんどなく、一部の学者が男性土偶としてきたものは、乳房や下腹部の膨らみを省略した中性的な土偶であろうとして、土偶はすべて女性像とみてよいであろうと結論付けている。しかし江坂は、「土偶そのものが女神像として尊厳を保ち、常時、崇拝物になっていた形跡は認められない。」とし、土偶の役割を「當時はただの土人形で、巫女のような呪者が呪文を唱えると、神が乗り移って神格化され、神事がとりおこなわれたのであろう」としている。八幡は「日本の先史上偶」（八幡1959）で、「遺跡内における土偶の在り方から土偶の意義をあきらかにすること」の重要性を説き、日本以外の土偶の在り方を概観し、「農耕社会・狩猟社会における女性土偶の役割の異同」を検討する必要性も説いている。昭和49年には、水野正好が「土偶祭式の復元」（水野

1974)で、土偶に、あるシステムを持った祭式があることを前提とし、その復元を試みている。水野は、土偶はすべて成年女性を表現したものであるとし、土偶自体の形から「第一相：母となるべき女、第二相：子どもをやどす女、第三相：子どもを育てる女」に土偶を分類し、すべての土偶をこの祭式に組み込んでいる。そして、土偶の破損は、この祭式の「死の表現のひとつのありかた」であるとし、土偶祭式の根底は、受胎・死・再生といった輪廻で、輪廻こそが縄文時代の「時代を示す思念」であったと結論付ける。水野は土偶 자체を観察した結果としているが、現在知られている土偶がすべてこれに当てはまるものではないことは確かである。なお、林謙作は「遮光器土偶小論」(林1976)で、亀ヶ岡文化圏の遮光器土偶の在り方から、水野の意見に賛同している。昭和50年代になると、「日本原始美術体系3」(永峯1977)や「日本陶磁全集3」(小林・亀井1977)、「日本の原始美術5」(水野1979)などの集大成が目立つ。小林は「日本陶磁全集3」の「祈りの形象」で土偶などの用途不明の遺物を「第二の道具」とし、破損して出土する土偶が多いことから、「土偶はあらかじめ壊しやすく作られている」という説を展開した。また、水野も「日本の原始美術5」で、先に触れた土偶祭式論を展開し、土偶の故意破損説を推し進めている。昭和50年代後半以降は、多くの土偶に関する論考が発表される。これは、「土偶とその情報」研究会による基礎データの集成と6回にわたり各地で開催されたシンポジウムの成果でもあった。その結果、土偶研究は型式論に関する論考が多くなると同時に、機能論や技法論に関する研究も増えた。鈴木正博は、「埼玉県高井東遺跡の土偶について」(鈴木1982)で、「上位土偶と下位土偶」という概念を提示している(註7)。また、鈴木は、荒海貝塚関連の論文(鈴木1993a, 1993b)で、縄文時代終末期の土偶が弥生時代へと移行する際に、機能変化を遂げる過程に

について述べている。土偶の製作技法に関しては、筆者が赤城遺跡の土偶などの観察をもとに、粘土を分割して作るのは、土偶(土人形)を作り易くするため、分割技法と「故意破損」は結びつかないことを指摘している(浜野1990b, 1991, 1992)。堀越正行は「堀之内貝塚出土の土偶」(堀越1996)で、同貝塚の土偶の出土数が各時期を通じて少ないことから、同貝塚では他の集落で作られた土偶を必要な時に入手して使ったのではないかと推論している。堀越は、縄文のムラで何らかの形で「土偶のマツリ」があったことは考えられるが、マツリのサイクルや一つの土偶の使用頻度、一集落における土偶の同時保有数はどうであったかというような重要な問題を提起している。ただ、土偶を制作していた遺跡か否かは、最終的な土偶出土数の多少で決められるものではなく、一遺跡ごとの土偶の在り方の多方面からの検討が重要になる。同じく平成8年、設楽博巳が「副葬される土偶」(設楽1996)で、土偶本来の特徴は、呪具であり、①成熟した女性原理を貫いて持っていたこと②ヒトの埋葬に伴わないことであるとし、他界觀が明確化された北海道の後期後葉に副葬の対象になり、その風習が縄文終末期の東北南部や東海地方に広まり、中部日本の弥生時代の再葬墓に影響を与えたと述べている。平成9年小林達雄は、歴史民俗博物館の「特集：ジェンダー社会的性差への視点」の「縄文土偶の仕事」(小林1997)というコラムで、初期の土偶が顔の表現が全く無く、乳房はかろうじて正面と背中を区別するにすぎないことから、土偶は「縄文人にゆかりのある精靈を、たまに耳にする声をもたよりに誰の目にも見える形にしようとしたのであり、もともとヒトを写す意図はなかったのではないか」と説く。さらに「それがヒトに似たのは、しばしば器物を人体に見立てて伝統的な癖によるのではないか」と続ける。そして、「土偶も暗中模索しているうちにヒト形となったのは自然のなりゆきで、その姿を獲得す

るや、しだいに既得権を主張して、豊満を誇示するうちに単なるヒト形の域から抜け出して女性像への傾斜を強めるものも出できた。」と説明する。また、土偶に完形品がめったにないことを「縄文人の手でバラバラにこわされたものと思われる」、「樟太アイヌやシベリアの狩猟民の間にみられる病氣治療などのために木製の偶像を犠牲にする例と共に心をうかがわせる」とし、「縄文土偶は、壊されることで、身体をはって仕事をしていた」と締めくくっている（註8）。平成14年には小杉康が『縄文社会論（上）』の「神像が回帰する社会」（小杉2002）で、土偶を①：女性、妊娠・出産、人面の象徴性が具現化されたもの（母体像）②：①の象徴性が潜在化・希薄化し、人面の象徴性が否定されたもの（神像）、③：①の象徴性と②の要素が拮抗しながら統一され具象化されたものの（半神半人像）に分類し、半神半人像が神像へ或いは母体像へ転化したとし、これらが縄文前期末から晩期にかけて反復的・隔世的に出現するという論を展開している。平成18年には松本直子が『心と形の考古学—認知考古学の冒険—』の中の「縄文イデオロギーと物質文化」（松本2006）で、南東ヨーロッパの新石器文化と縄文文化の共通点を定住的であることなどのいくつかの要素を挙げ、縄文土偶と南東ヨーロッパの土偶を比較しつつ、「人間の女性の身体をモデルにしている限り、形態的にある程度の類似性が生じるのは当然」であり、その共通点を「具体的な形態よりも、出土状況や変化の方向性などのコンテキストに関するところに認めることができる」とし、土偶は、「各地域の歴史の中で、それぞれ初めて大量の物質文化を継続的に生産することにより、それまでにない人工的な住環境を作り出した時代」に、「そこで生じる複雑な社会的規範や世界観の再生産に対して物質文化が果たす役割が格段に大きくなつた」ため、「特定の形式で作られた人工物を装備した特定の土地との結びつきが重要になり、そこ

で生じる複雑な社会的規範や世界観の再生産」に役割を果たしたのであろうと結論付けている。また、南東ヨーロッパの新石器文化と縄文文化との（土偶？）の共通点を「多くは女性を象ったものだが、男性や性別不詳のもの、動物などもある」とこと、「土偶の多くは土器と同様に破片となって集落遺跡に堆積している」ことなどをあげ、「縄文土偶では乳房を、南東ヨーロッパの土偶では腰部と陰部をより積極的に表現するという違いはある」が、「それぞれの文化の初期の段階には土偶の数も、施される装飾も少ないが、拠点集落が発達し人口密度が増加するのと軌を一にして、顔や頭部、身体の装飾、腕や脚の表現が発達する」ことが、概ね共通していると指摘している。松本は、このような土偶の変化の解釈の一例として小杉の「母体像・神像・半神半人像としての特徴が、縄文前期末から晩期にかけて反復的・隔世的に出現する」（小杉2002）とする論考を土偶の複雑な様相を統一的に理解するものとして重要であると評価している。平成19年には筆者が、「原始・古代日本の祭祀」の「縄文土偶と祭祀」（小野2007）で、土偶とユーラシアの後期旧石器時代のヴィーナス像との関連を念頭に置きながら「土偶は、基本的には女性の姿を模した「小像」として、その機能とともに縄文社会に受け入れられたもの」と考え、土偶の乳房や胸部の表現、腹部の表現、腰部と臀部の表現を類型化し、縄文草創期以来晩期後葉までの時期ごとの表現の変化について考察を加え、「土偶に求められた初期の機能が多産と繁栄、食糧獲得などへの祈りであったことは、初期の土偶が成人女性の姿を模ったものであることからも容易に理解できる。そして土偶は、縄文社会の自然とのかかわりあいの中で、各時期や地域の集團ごとの「祈り」を表象するものとして大切に扱われ、縄文時代の初めに土偶を受け入れてから縄文時代晩期後半まで、時期や地域による機能の差は生じても、一定の規範のもとに作られ、用いられたと

考えられる。」とし、土偶は、多産と繁栄、食糧獲得などへの祈りの対象として日本列島に伝わり、縄文社会の中で変貌を遂げ、縄文終末期には、葬送儀礼に組み込まれやがて消滅していったものと指摘している。また、土偶が故意に破損されたとする考え方を取りず、土偶の破損率の高さと土偶の祭祀を同レベルで論じることは、あえて行っていない。土偶の胸部は「カンバス」として重要な意味を持ち、そこに表現された「多産や繁栄、食糧獲得などの祈り」の象徴でもある土偶を一度の使用で故意に破損するとは到底考えられず、一個の土偶が何度も使われたろうと推論している。

さて、ここまで、土偶研究が始まって以来の用途や機能に関する論考を中心に取り上げてきたが、①小児の玩弄物、②神像、③装飾品（何らかの形で身に着けた？）、④服飾にして或は護身牌を兼ねるもの、⑤女神即妊娠の崇拝する安産の守神説など初期の土偶研究で指摘されていたもの。次いで⑥地母神信仰があったとする説、⑦各人、各部落が随意に製作し、崇拝し、携帯し、一旦破損すればその能力を消失し、土器の破片と同一視され廃棄されたとする説、⑧歐州旧石器時代後期のVenus像との関連、⑨土偶は、すべて女性像とみてよいが、女神像であった形跡は認められず、當時はただの土人形であったろうとする説。⑩土偶は、すべて成年女性を表現したものであるとの前提で「母となるべき女・子どもをやどす女・子どもを育てる女」の三相に土偶を分類し、「受胎・死・再生」といった輪廻こそが「縄文時代を示す思念」であったとする土偶祭式論、⑪土偶などの非実用とされる遺物を第二の道具として捉えようとする試み、⑫上位土偶と下位土偶という概念で土偶を解釈しようとする試み、⑬一つの土偶の使用頻度や一集落における土偶の保有数などの問題提起、⑭葬式土偶、副葬品としての土偶の存在、⑮故意破損説（註9）、⑯多産と繁栄、食糧獲得などの祈りの対象などの観点に整理することができる。

これらをさらに整理すると、第一：土偶を女性像と観るか否か（⑥・⑧・⑨・⑩・⑯）、第二：土偶は故意に破損されたか否か（⑩・⑯）、第三：遺跡内の土偶の在り方に注目し、解釈しようとする観方（⑦・⑫・⑬・⑭）、第四：神像説（②・④・⑤・⑯）、第五：その他（①・③・⑪）の五つに分けることが可能である。

3 土偶の具象とジェンダー

さて、縄文社会のジェンダーの在り方と土偶研究の関連を考察しようとする際、まず、第二の、土偶が故意に破損されたか否かの視点は除外してもよいであろう。何故なら、土偶が女性を模したものであれ、男性を模したものであれ、或いはそれらを超越したものであれ、壊されて存在意義を保つ（？）ことが、縄文社会のジェンダーを反映した結果だと考えることはできまい。筆者は、土偶の故意破損説に肯定的ではなく、「壊すため」或いは「あらかじめ壊しやすく作られた」という観方には完全に否定的である。この稿は、土偶の故意破損説を云々するものではないので、詳述は避けるが、土偶の内部観察やアスファルトで補修された土偶の存在などがそれを裏付けているし、研究史でも触れたが、谷川が「土偶も完全なものはよく靈力を憑らしめて magic として役立つが、一旦破損すればその能力を消失して、土器の破片と同一視せられ、貝塚に放棄されるに至った」（谷川1926）としているように、土偶は破損するまで使用され、その能力が保持できなくなった時に初めて廃棄されると筆者も考えるからである。

また、第五のその他も除外してよいであろう。第二の道具というとらえ方は、土偶などの遺物をできるだけ客観的に捉えようとする試みで、これ自体は画期的な観方であると言える。また、小児の玩弄物、装飾品説などは、縄文社会のみならず、他の石器時代文化の小像の在り方などからも、今日的な検討からは除外してよいと考える。

土偶研究と縄文社会のジェンダーの在り方を検討しようとする場合、五つの視点のうち、第一の土偶を女性像と観るか否か、第三の遺跡内の土偶の在り方に注目し、解釈しようとする観方、第四の神像説などに関する吟味が重要になる。

第一の土偶を女性像と観るか否かであるが、地母神説、石器時代の *Venus* 像との関連を指摘する説、すべて或いは大半が女性像（ただし女神像ではないとする）とする説、妊娠像や「受胎・死・再生」を前提とする土偶祭式論などの視点で論じられてきたものが、これに含まれるであろう。第一図 2～12、15～17、第二図 1・2、5・6、10・12～14などは、これらを如実に反映していると考えられる例である。特に第一図15の子どもを背負う土偶や16の授乳をしている土偶、17の胎内に小粘土塊が入った土偶などは、具体的な行動や状況を表現したものとして、しばしば採り上げられる資料である。しかし、残念なことに子どもを背負う土偶（石川県上山田貝塚）や授乳する土偶（東京都宮田遺跡）などの具象的な仕草や行為を表現している土偶は、多くは知られていない（註10）。上山田貝塚や宮田遺跡の例からは、縄文時代でも授乳は当然のこと、子どもを背負うということをおそらくは女性の行為であったろうという想像はつく。また、時代も地域も異なるが、第一図 1 のスペインのビゴルプの「クモの巣洞窟」群の中石器時代の岩壁画は、樹上の巣から天然の蜂蜜を容器に採集する女性を描いたとされているものである（M·Ehrenberg 1997より）。これらの大変希少な資料からわかることは、石器時代の女性の仕事のほんの一部で、当時の女性が育児に携わっていたこと、ある程度の困難を伴う採集にも従事していたことぐらいであろう。

ところで、土偶は女性を写したものであったのかという問い合わせあるが、素直に土偶を見た場合、その大半は「女性を模った像」であると言うことができる。東京都檜原遺跡例のように胎内に小粘

土塊や小石が入れられた土偶は、東京都や中部高地で数例知られていて、これらは、妊娠状態を表現したものと考えられている。また、腹部の膨らみを持たない土偶や乳房の表現が貧弱なもの、乳房の表現が抽象化されたものなど地域や時期によって、土偶は様々な様相を呈するが、江坂が指摘するように、積極的に男性を表現した土偶の存在は知られていない（註11）。また、筆者も以前から指摘しているが（浜野1990a、小野2007）、縄文時代の土偶が縄文文化内で独自に発生したとは考えられず、「造形そのものか、観念のみ」であったのかはともかく、前代の周辺地域の影響を受けて発生したのであれば、「女性像」として縄文文化に受け入れられ、縄文土器に見られるような装飾を好む縄文人により、地域ごと時期ごとに複雑な展開をしたのであろうと考える。小林は初期の土偶について、縄文土器に確かな造形力を發揮しながら、眼・鼻・口など顔の表現がまったくなく、あいまいなつくりなのは、ヒトを写す意図がなかったからで、縄文人にゆかりのある精靈を、たまたま形にしたためであろうと推察し、縄文土偶は「縄文人が独自につくり出したもの」としている（小林1997）。しかし、表現の優劣を云々するのであれば、縄文晩期に多く出現する中空土偶を例にとれば、内面は粗雑で輪積の痕や指痕を残したままなのに外面装飾や文様を細かい拘りで表現していることや、同時期に併存する小型で素朴な土偶など、「個々の土偶に何を求めていたか」に尽きるのではないだろうか。初期の土偶が数cmと小型なことと「女性像」として受け入れられたことを考慮すれば、小林の指摘するように「ヒトを写す意図がなかった」のではなく、初期の土偶は、携帯できる大きさと体部（胴部）表現に拘って表現された結果、小型で素朴な表現になったと考えるのが自然であろう。土偶の大半は女性像であり、明確な男性像が存在しないこと、縄文社会の中で時期ごと地域ごとの求めに応じて種々の変容を遂

げていったことなどを考え合わせると、初期の土偶が「女性像」として受け入れられたとしても何の不都合もないであろう。

次に第四の神像説であるが、これには地母神説や安産の守り神、護身牌説なども含まれるであろう。地母神説は、ヨーロッパ新石器時代の土偶の解釈に影響を受けたものであるが、地母神説自体、当のヨーロッパで、エーレンバーグなどによって、疑問が提出されている(M-Ehrenberg 1997)。また、土偶は、その面貌ゆえに、「神像」であるとする考え方も明治時代以来存在する。これを明確に打ち出している小杉によれば、「母体像・神像・半神半人像としての特徴が、縄文前期末から晩期にかけて反復的・隔世的に出現する」(小杉 2002)という。ただし小杉は、神像と半神半人像に関しての性別には言及していない。おそらく、前提に女性像があるのであろう。また、人像と神像の区別を、土偶の顔面表現が「人面」か「非人面」かで判断しているが、図示された資料からは、「人面」と「非人面」についての客觀性は窺えない。

順番が逆転したが、第三の遺跡内の土偶の在り方に注目し、解釈しようとする観方は、谷川(大場)の「各部落が随意に製作し、崇拝し、携帯し、一旦破損すればその能力を消失し、土器の破片と同一視され廃棄された」とする説(谷川 1926)、鈴木正博の上位土偶と下位土偶という概念で土偶を解釈しようとする試み(鈴木 1989)、堀越が提起する一つの土偶の使用頻度や一集落における土偶の同時保有数などの問題(堀越 1996)、鈴木正博や設楽が指摘する葬式土偶、副葬品としての土偶の存在(鈴木 1993a,b、設楽 1996)などである。今から約90年前に、谷川(大場)が示した卓見もそうであるが、堀越が提起する一つの土偶の使用頻度や一集落における土偶の同時保有数、鈴木正博の提唱する上位土偶と下位土偶の存否やその割合の検証などが今後の土偶研究にとって、より重要ななると思われる。ただし、ジェンダー考古学

的視点で土偶を觀ようとする場合、例えば、上位土偶とされた土偶の表現が女性像寄りであるか、男性像寄りであるか、中性的であるかなどは重要な問題となるであろうし、堀越が提起するように、土偶の出土例が周辺の遺跡に比べ極端に少ない遺跡の場合、普段は土偶を持たず、儀式(祭祀)のたびに、土偶を生産(保有)する遺跡から借りていたのか、毎回同じ土偶を借りていたのか、儀式によって異なる土偶を借りたのか、完品しか借りなかつたのか、一部を破損していても目的に合っていれば借りたのかなど、検証しなければならない課題が多いことも事実である。しかし、先史時代のジェンダーのような抽象的な内容を問題にする場合、女性像か否か、人像か神像かなどの問題提起に先んじて、一集落における土偶の同時保有数、一つの土偶の使用頻度、これらの検証の結果導き出される「土偶の在り方」、遺跡における土偶の最終的な姿などの分析が、より重要になる。

4 結語

ジェンダー考古学については、松本直子などによる先駆的な研究が見られる(松本他 1999)。松本は、ジェンダー考古学を「考古資料に基づいて過去の社会における性分業のパターン、男女の経済的・社会的較差、そして世界觀におけるシンボリックな位置づけ等について復元し、それらの形成過程や他の社会的・文化的側面との関係等について探究するものである。」と定義し、「何をもって重要な問題とみるか、どのような方法を正しいとみるか、というような根本的な枠組みを問い合わせない限り、いくら女性についての事例研究を積み重ねても根本的な解決には至らない」としている。さらに、「現在の考古学研究を規制している男性中心の考え方や問題設定をそのままにして、これまで欠けていた女性の役割を補完するだけでは、根本的な問題解決には至らず、考古学的証拠からは導き出せないようなところまで過去のジェ

ンダーを復元し、現代社会における性的抑圧の構造を強化・再生産することに意図せずに貢献してしまうことを避ける」ため、フェミニズムの視点からこれまでの研究成果を見直すことの必要性を強調する。さらに松本は、「縄文時代の考古学10」のIV社会組織の「ジェンダー」の項(松本 2008)で、民族事例や「ものづくり」に関するステレオタイプの観方(例えば：石器づくり=男性、土器づくり=女性)を縄文社会に当てはめることに疑義を挟み、母系制や父系制、縄文社会の構造や年齢構成、人骨や副葬品、装身具、食性分析などからジェンダーに関する問題点を整理しようと試みている。菱田淳子も、母性や「母子像」を例に引き、男性領域の平均値をもって人間全体の平均とするような見方で考古資料を分析してきたことの危うさを指摘し、女性研究者が、自らの視点・視野と既成の学問とのずれにより、多視点の見方を得られるメリットにもっと自觉的になるべきであると説く(菱田 2004)。山梨県立考古博物館の特別展図録「発掘された女性の系譜－女性・子ども・家族の造形－」(保坂他 2010)は、まさに、男性領域の平均値をもって人間全体の平均とするような見方で考古資料を展示・解説したもので、「土偶について」というコラムで「土偶は縄文時代草創期から晩期まで、縄文時代を通して見られる遺物で、女性や妊娠(妊娠像とは書かれてない：筆者注)をかたどっており…」とし、女性の役割は「出産と子育て」だけであったような編集となっている。同様の内容は、「縄文の人骨×性別」語る副葬品—男は石斧・女は石皿—富山・小竹貝塚]と題した朝日新聞の平成22年6月25日付の記事にも見られる。記事には、「縄文時代の人骨に伴う石斧は男性の権威の象徴として、調理具の石皿は女性の象徴として副葬したとみられる例が報告されており、男女の社会的な役割を示している」と記されている。このような「男女像(=考古資料そのものではない、概念的な意味での男女

のイメージ)」の再生産は、所謂ジェンダー・バイアスの所産であり、それを増幅するものといえる。考古資料の解釈にあたり、「ジェンダー・バイアス」は、取り除かれるべきものであり、不用意な言説が一般書や新聞で広められた場合、多くの誤解を生む危険性を孕んでいることを指摘したい。

ところで、渡辺仁は、「縄文式階層化社会」(渡辺 2000)で、「狩猟採集社会であっても、特殊条件下では例外的に階層化が起こり、技術や経済の分化と不可分の信仰・儀礼の分化が伴い、貧富の差は、経済力や権力の差だけではなく、自然界との儀礼的関係(=神々との関係)の深さの差として発生する」とし、縄文社会のモデルを獵採集民である北洋沿岸のアイヌや北西海岸の民族事例に求め、「縄文社会が定住的階層化狩猟社会であり、精製土器は、社会の上層によって作られ、政治的指導者により保有・管理された財宝であり、威信経済の象徴である」、「縄文社会の指導者は、退役狩猟者で、首長・長老群を形成し、指導者層を成し、非狩猟者(女・子ども・老人など)を許容する社会では階層化が起こり、体力的に劣る者も受け入れる社会が形成される」という論を展開し、土偶については、個人の福祉(=玩具・信仰・儀礼)に関するものとしている。渡辺の「精製土器は、社会の上層によって作られ、政治的指導者により保有・管理された財宝であり、威信経済の象徴」とする縄文社会に関する見解は、明確な検証もなく、現生の民族事例の解釈にもジェンダー・バイアスなどへの配慮が皆無であることがわかる。

井川(F.Ikawa 2002)は、日本の土偶研究について初期の学説及び縄文土偶が女性像のみか男性像も存在するのかの論争を紹介し、水野正好の「土偶祭式の復元」(水野1974)や渡辺仁の一連の民族考古学的な研究(渡辺1997、1998、1999)に触れ、縄文土偶の機能をすべて同一のものと觀っている点は、両者(水野と渡辺)とも変わらないと喝破する。さらに、渡辺の解釈については1920年代の研

究に戻ったようだと酷評する。そして、15,000例を超える土偶の集成資料（註12）は、ジェンダーの探求に十分であり、土偶の特徴をいくつか挙げ、前代的な解釈から脱却する必要性を説く。また、縄文土偶の解釈にあたり引用した文献が、一例を除き男性によるものであることに触れ、考古学研究におけるジェンダーの不均衡を指摘している。

『Women in Prehistory』を著したエーレンバーグは、「石器時代人（Stone Age Man）」とともに暮らしたはずの「石器時代女性（Stone Age Woman）」を念頭に置いたことさえなかったように思える考古学者に読んで欲しくてこの書を著したと「はじめに」で記している。考古証拠が「先史ヨーロッパの女性の暮らし・社会的役割・身分」に光を当てるには、どうすれば可能かを探ると同時に、考古証拠の限界や利用法について、「専門知識を欠いた一部の女性史研究者に向け、考古証拠の何たるかを示すことは考古学者の責任であり、女性の視点で考古証拠を解釈することの魅力を伝えたかった」と記し、「ヨーロッパ先史時代の記録から女性の役割と身分を研究できるかどうかの可能性の一端を追求しようとする一つの試み」としている。エーレンバーグによれば、考古資料には、過去の人々が無意識に残した証拠があり、先史時代のすべての女性と男性について語ってくれるため、一社会内部の階層化の程度についての示唆を得ることも可能であるという。また、芸術作品にとしての女性像を取り上げ、先史時代の女性についてのかなり重要な情報源ではあるが、「女性の造形が、その社会内部の女性の本当の位置を映していると考えるのは危険」であり、他の情報源と同様、十分な注意をはらって研究し、解釈しなければならないと指摘する。例えば、現生のアボリジニのティウィ族は、女性が石斧を作り、陸上の哺乳動物を捕獲し、男性は海と空の食料獲得に従事していること、新石器時代のヨーロッパには、男女ともに釣針と共に埋葬されている例が

あることなど、分業の内容が決して普遍的でないことも指摘している。また、ヨーロッパにおいて、石器時代のヴィーナス像や母神像は、60点を超す資料が出土していて、高さは6cm～22cmの範囲に納まり、概して小型のものが多く、様式的には、大きな乳房と大きな尻、太い腿を持ち、腕や脚、顔などの表現は簡略化され、大雑把な表現に留まるか、全く表現されないかで、概して、裸体であるのが特徴であることにも触れている。さらに「旧石器時代の小像が一定の分布域と著しい類似性を示すのに対し、新石器時代の小像は、粘土製ということもあり、地域ごとの特徴を持つようになるが、ごく基礎的なレベルでは関連性を持っている」と指摘する。さらに、ヨーロッパに於ける男性優位型農耕社会の始まりは、家畜の多頭飼育の開始に起因し、それは、新石器時代後期頃（BC 3000頃）であったろうと指摘している。さらに、考古証拠は、個別の研究者が好む解釈の枠組みに左右されやすいこと、過去に多くの考古学者がヨーロッパ先史人（men）について書く際に、先史時代の男性と生活を分担してきた先史時代の女性（woman）は、無意識にではあろうが無視されてきたことを指摘する。

さて、筆者は土偶の研究から縄文社会のジェンダーに言及できるか否かを模索しつつこの稿を進めてきた。学部時代に興味を持ったいくつかのテーマの中から土偶の研究を選び、国内外の資料を集めているうちに、縄文土偶の意味を解明するには、先史時代に骨角牙製や石製、土製などの「小像」を持っていた人々の文化を探ることが重要であり、縄文土偶の研究のために欠くべからざるものと考えるに至った。

縄文土偶に求められた初期の機能は、多産と繁栄、食糧獲得などへの祈りであったことは、初期の土偶が小型でシンプルなものでありながら、成人女性の姿を模ったものであることからも容易に理解できる。土偶は、縄文社会における自然との

かかわり合いの中で、各時期や各地域の集団の「祈り」を表象するものとして大切に扱われ、役割を全うしたのであろう。

土偶が土壇などから出土することは稀であり、大半の土偶は、通常の集落跡から他の遺物に混じって出土する（註13）。このため、出土状況からその機能を探ることには困難が伴うが、縄文中期の長野県棚畠遺跡例（第1図18）のように土壇に埋納され、ほぼ完全な状態で出土する土偶も報告されている。また、縄文後期の岩手県立石遺跡や晩期の山梨県金生遺跡のように大規模な配石造構のあちこちから多数の土偶が出土する例や、埼玉県赤城遺跡のように縄文晩期の土偶が數十点、一定範囲から他の祭祀遺物などと混じって出土する例も見られる。土偶の用途は多様であり、大きさや乳房、腹部、臀部などの強調の仕方も時期や地域により様々であることがわかる。しかし、縄文時代のはじめに土偶を受け入れてから縄文時代晩期の後半まで、時期や地域による機能の差（表現の差）は生じても、土偶は、より根本的な部分では、一定の観念のもとに認識され、一定の規範のもとに作られ、使用されたと考えられる。

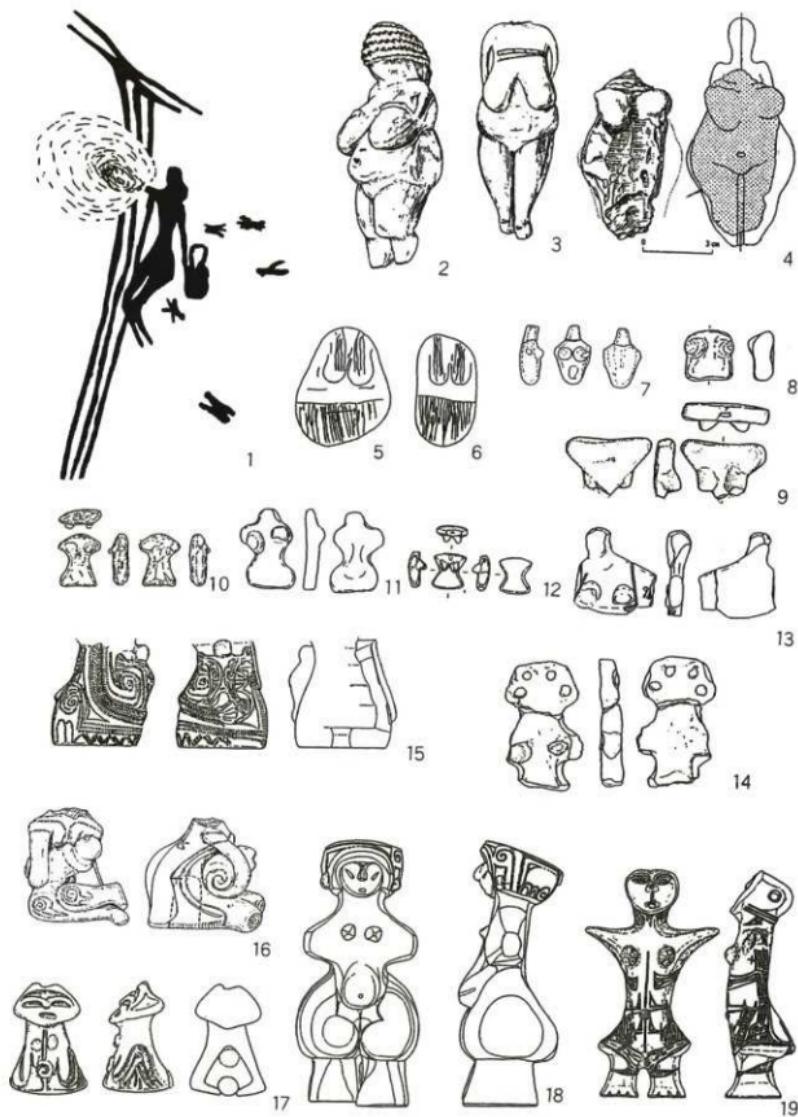
土偶の機能は、時期や地域により徐々に変化を遂げ、縄文晩期の終末期以降、さらに大きな変化を遂げると考えられる。土偶は再葬墓などからの出土が目立つようになり、神奈川県中屋敷遺跡出土の小兒骨が入れられた土偶型容器のように、埋葬にかかる例も見られるようになる。また、この時期には、男女を作り分けていると思われる土偶も散見するようになる。土偶を神像と仮定すれば、男神と女神が対になった小像の出現は、ある程度安定した農耕社会に見られる現象であり、東ヨーロッパなどにおいても、エーレンバーグが指摘する「家畜の多頭飼育と草を使う農耕の始まり」の時期に「男女が対になった小像」が出土することと比較しても面白い現象であると言えよう。土偶は、多産と繁栄、食糧獲得などへの祈りの対

象として縄文社会に受け入れられ、縄文社会の中で種々の変貌を遂げ、縄文終末期には、葬送儀礼に組み込まれやがて消滅したものと考えられる。

ところで、土偶研究から縄文社会のジェンダーが解明できるかどうかであるが、結論から言えば、現状では困難であろう。土偶に何らかの行為を表現している例は少なく、子を背負う、授乳する、壺を抱えるなどの例も希少である。土偶に女性像が多いことは幾度も触れたが、だからと言って単純に、当時の女性が「子育て、採集或いは家事」などに従事していたとするにはあたらない。女性が石器を作ったり、陸上の哺乳動物を捕ったりしている例もあるのだから。これは、土偶が本来「人像」ではなく、女性としての形は後出のものであるとする立場であっても、「土偶が女性の形を獲得していく段階で女性の活動を写していった」と捉えるのは強引すぎるであろう。また、仮に土偶に「地母神」としての機能があったとしても、それがそのまま当時の「女性の在り方」を反映しているとは言えないであろう。

筆者が、土偶の解釈から当時の社会の在りように迫る手段の一つと考えるのは、鈴木による「上位土偶と下位土偶」の指摘である（註14）。土偶の大半が「女性像」であるのならば、一遺跡の同時期において「これらがどちらも存在するのか、どちらかしか存在しないのか、どちらも存在する場合の比率はどうなのか」という点についての遺跡ごとの詳細な分析を経ることで、これらの土偶に反映された女性の姿を垣間見ることができるのではと考えるのである。当然、堀越の指摘する、一つの土偶の使用頻度や一遺跡の同時期の土偶保有数も考慮に入れるべき重要な問題である。

以上、土偶研究とジェンダー考古学について述べてきたが、一見新しいテーマでも、地道で多角的な視点で縄文土偶を観ていかない限り、解決策（＝ジェンダーの解明など）もあり得ないということを指摘してこの稿を終えたい。



第1図 人像・土偶のいろいろ (縮尺不同)



第2図 土偶のいろいろ (縮尺不同)

註

- 1 若林の3類の分類中、①は大型の遮光器土偶、②は小型の中実土偶、③は土面にあたると考えられる。
- 2 大野は、この他に翌明治31年「岩盤モ土偶ニ関係アリ」、明治34年位に「石器時代土偶系統品と文様の変化について」、「羽後國麻生発見の土偶」など（いずれも東京人類学会雑誌に発表）を著している。
- 3 坪井の論文は、土偶の表現に男女差があることを指摘した最初のもので、着衣の特徴にも言及している。
- 4 有鬚土偶については、「鬚」の表現ゆえに男性土偶と考えられていた。今日では、有鬚か無鬚かで男女の別を論じることはない。
- 5 坪井は、明治24年の「ロンドン通信」で、「雪中遮光器説」をさらに、明治27年再度「遮光器説」を提唱した。その後、大正13年には島居龍蔵が、遮光器説に賛同している。
- 6 昭和3年には甲野勇の「日本石器時代土偶概説」、翌4年には中谷字宇二郎の「日本石器時代提要」が著され、中谷は、従来の土偶の分類が顔面のみを基にしてなされていることに疑問を呈し、土偶の全形から分類すべきことを提唱している。
- 7 鈴木は、上位土偶とは精製土器様式と関連する文様様式により表現された土偶で、物流体系に組み込まれる点に上位なる意義を持つ。集団内あるいは集団間に共通認識の存在した製品であるとし、下位土偶とは、共伴土器が不明な場合時期決定が困難で、集落内で個人的に使用されたものとしている。また鈴木は、平成24年刊行の「土偶と縄文社会」の座談会で、上位土偶を「女神説」と下位土偶を「安産のお守り説」と対応させている。
- 8 小林は、初期の土偶が女性を模したものであることをどうしても認めたくないため、このような理屈を考え出したのであろうか。もし、小林の考え方を「是」とするなら、新石器時代以前のヴィーナス像とされているものの大半に、顔面表現がなく、四肢が簡略化されているものをどう解釈するのであろうか。また、小林が「土偶は、縄文人にゆかりのある精靈を、たまに耳にする声をもたよりに誰の目にも見える形にしようとしたものであり、もともとヒトを写す意図はなかった」とするのは、土偶が縄文文化の中から独自に出現したものという立場に固執するゆえであろう。
- 9 土偶は、あらかじめ壊しやすく作られたとし、分割技法による接合面は、板チョコレートの溝のようなものとする説。ただし、チョコレートの溝は、壊しやすくするためのものではなく、型に、均一にチョコレートを流すためのものらしい。
- 10 この他、縄文中期の関東や中部地方に何例か見られる「壺を抱えた土偶」や東北地方の後・晩期にみられる「膝を折った折りのポーズや考える仕草をする土偶」が存在するが、これらは、男女の分業のような視点とは結びつかないであろう。
- 11 第1回7~12などの土偶が、ヒトを写したものでも、女性を模したものでもないということを主張するのには、相当の無理がある。材質こそ違うが、現在のところ日本最古の人像である同図5・6の愛媛県上野黒岩洞窟遺跡出土の石偶にしても、女性を表現していることは明白である。同遺跡の石偶の中には、女性の特徴を表現していないものも見られるが、女性像があることは事実である。
- 12 1992年の「土偶とその情報」研究会による集成『国立歴史民俗博物館研究報告37』の時点の数であり、現在、土偶の報告例は、20,000点を超えていくと思われる。
- 13 特殊な遺構から出土する土偶は、昭和29年頃から注目され、これまでに約30例が知られている。この他に、本文中でも触れたが、埼玉県の赤城遺跡のように、石棒や石剣などの特殊な遺物や、古い時期の土器の把手などと共に、数十点の土偶が出土した例もあり、縄文時代の後・晩期ではこのような例が今後も増加する可能性がある。
- 14 鈴木の「上位土偶」、「下位土偶」という捉え方や上位土偶を「女神像」、下位土偶を「安産のお守り」と対応させる考え方を必ずしも支持しているわけではない。また、鈴木も「上位土偶」、「下位土偶」という概念が「ジェンダー考古学」の解釈に役立つかもしれないとは考えていないであろう。ただ、縄文集落が保持していた土偶を、その集落の中で位置づけ、解釈しようとする試みは、評価に値すると考える。

引用・参考文献

- Fumiko Ikawa-Smith 2002 「Gender in Japanese Prehistory」[In Pursuit of Gender] Worldwide Archaeological Approaches Edit by Sarah Milledge Nelson University of Denver
- Margaret Ehrenberg (原著) 1989 「Women in Prehistory」 192 pages 52 figures, and an index British Museum Publications,Paper.ISBN
- Margaret Ehrenberg 1997 「先史時代の女性 ジェンダー考古学始めて」 訳: 河合信和 河出書房新社
- 穴沢裕光 1991 書評「マーガレット・エーレンバーグ『先史時代の女性』」「考古学研究」第38巻1号
- 阿部芳郎編 2012 「土偶と縄文社会」第V章 座談会: 土偶研究と縄文社会 雄山閣
- 江坂輝彌 1960 「土偶」校倉書房
- 大野延太郎 1897 「土偶ト土版トノ関係」東京人類学会雑誌第12巻131号 東京人類学会
- 大野延太郎 1910 「土偶の形式分類に就て」東京人類学会雑誌第26巻296号 東京人類学会
- 小野美代子 2011 「土偶研究とジェンダー考古学(I)【研究紀要25】財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小野美代子 2007 「縄文土偶と祭祀」[原始・古代日本の祭祀]杉山林雄・山岸良二編 同成社
- 甲野 勇 1939 「容器的特徴を有する特殊土偶」人類学雑誌第54巻12号 東京人類学会
- 甲野 勇 1940 「土偶型容器に関する一二の考察」人類学雑誌第55巻1号 東京人類学会
- 小杉 康 2002 「神像が回帰する社会」[縄文社会論(上)]安斎正人編 同成社
- 小林達雄・亀井正道 1977 「土偶・埴輪」日本陶磁全集3 中央公論社
- 小林達雄 1997 「Column ジェンダー 縄文土偶の仕事」[特集: 現代社会と歴史学 ジェンダー社会的性差への視点]歴博80 国立歴史民俗博物館
- 酒井忠純・江坂輝彌 1954 「山形県飽海郡戸川村杉沢発見の大洞C2式の土偶の出土状態について」考古学雑誌第39巻3・4合併号 日本考古学会
- 設楽博巳 1996 「副葬される土偶」[国立歴史民俗博物館研究報告 第68集] 国立歴史民俗博物館
- 白井光太郎 1886 「貝塚より出し土偶の考」人類学雑誌第2号 人類学会
- 鈴木正博 1982 「埼玉県高井東遺跡の土偶について」古代 第72号 早稲田大学考古学会
- 鈴木正博 1993a 「荒海貝塚文化の原風土」古代 第95号 早稲田大学考古学会
- 鈴木正博 1993b 「荒海貝塚研究と大阪湾、「スティング」風に」利根川14 利根川同人
- 田邊義一 1949 「破折端にアスファルトの附着した土偶について」人類学雑誌第61巻9号 東京人類学会
- 谷川馨雄 1926 「土偶に関する二・三の考察」國學院雑誌第32巻5号 國學院大學
- 坪井正五郎 1898 「貝塚土偶の男女」東洋学芸雑誌第15巻206号 東洋学芸社
- 鳥居龍藏 1922 「日本石器時代民衆の女神信仰」人類学雑誌第37巻11号 東京人類学会
- 中島壽雄 1943 「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」人類学雑誌第58巻7号 東京人類学会
- 永峰光一 1977 「呪的形象としての土偶」、「土偶の系譜」「日本原始美術体系3」講談社
- 浜野美代子 1990a 「土偶出現の時期と形態」[特集: 縄文土偶の世界]季刊考古学第30号 雄山閣
- 浜野美代子 1990b 「縄文土偶の基礎研究」古代 第90号 早稲田大学考古学会
- 浜野美代子 1991 「土偶の製作技術-赤城遺跡出土資料を中心に」[埼玉考古学論集]財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 浜野美代子 1992 「土偶の破損」[研究紀要9] 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 林 謙作 1976 「遮光器土偶小論」「東北考古学の諸問題」東北考古学会編 寧楽社
- 菱田淳子 2004 「考古学と女性の視点」「文化の多様性と比較考古学」所収 考古学研究会

- 保坂康夫他 2010 「発掘された女性の系譜－女性・子ども・家族の造形－」第28回特別展図録 山梨県立考古博物館
- 堀越正行 1996 「堀之内貝塚出土の土偶」市川市立考古博物館年報第23号 市川市立考古博物館
- 松本直子・中園聰・川口香奈絵 1999 「フェミニズムとジェンダー考古学－基本的枠組み・現状と課題－」
『HOMINIDS』Vol. 002
- 松本直子 2004 「認知・身体・文化」「文化の多様性と比較考古学」所収 考古学研究会
- 松本直子 2006 「縄文イデオロギーと物質文化」「心と形の考古学」小杉康編 同成社
- 松本直子 2008 「ジェンダー」「人と社会 人骨情報と社会組織」縄文時代の考古学10所収 同成者
- 水野正好 1974 「土偶祭式の復元」「信濃」26巻4号 信濃史学会
- 水野正好 1979 「日本の原始美術5 土偶」講談社
- 八幡一郎 1939 「日本先史人の信仰の問題」「人類学・先史学講座 第13巻」雄山閣
- 八幡一郎 1959 「日本の先史土偶」MUZEUM 第99号 東京国立博物館
- 山崎義男 1954 「群馬県郷原出土土偶について」考古学雑誌第39巻3・4合併号 日本考古学会
- 吉田 格 1948 「茨城県花輪台貝塚概報」日本考古学第1巻1号 日本考古学研究所
- 若林勝邦 1891 「貝塚土偶ニ就テ」東京人類学会雑誌第6巻61号 東京人類学会
- 渡辺 仁 1997 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（I）」「国立民族学博物館研究報告」22巻4号
- 渡辺 仁 1998 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（II）」「国立民族学博物館研究報告」23巻1号
- 渡辺 仁 1999 「縄文土偶と女神信仰－民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（III）」「国立民族学博物館研究報告」24巻2号
- 渡辺 仁 2000 「縄文式階層化社会」六典出版

挿図一覧

- 第1図 1. スペイン、ピコルブの「クモの巣洞窟」群の中石器時代の壁画、2. オーストリア、ヴィレンドルフのヴィーナス（石灰岩製）、3. ソ連、コステンキ（マンモス牙製）、4. チェコ、ドルニ・ヴェストニツェ（焼成粘土製）－1～4 : M.Ehrenberg「先史時代の女性」より－5・6. 愛媛県上黒岩遺跡、7. 三重県粥三井尻遺跡、8. 大阪府神並遺跡、9. 千葉県木の根遺跡、10. 千葉県中鹿子第2遺跡、11. 茨城県花輪台遺跡、12. 千葉県小室上台遺跡、13. 埼玉県井沼方遺跡、14. 山梨県御池堂遺跡、15. 石川県上山田貝塚、16. 東京都宮田遺跡、17. 東京都檜原遺跡、18. 長野県櫛畠遺跡、19. 長野県坂上遺跡－5～14、17～19 : 小野「縄文土偶と祭祀」「原始・古代日本の祭祀」、15・16 : 土偶とその情報研究会「中部高地をとりまく中期の土偶」より－
- 第2図 1. 岩手県立石遺跡、2. 宮城県宝ヶ峰遺跡、3. 福島県柴原A遺跡、4. 神奈川県三ツ沢貝塚、5. 福島県上岡遺跡、6. 茨城県金洗沢遺跡、7. 埼玉県原ヶ谷戸遺跡、8. 埼玉県雅楽谷遺跡、9. 埼玉県淹馬室遺跡、10・11. 愛知県八王子遺跡、12・13. 愛知県今朝平遺跡、14. 三重県天白遺跡、15. 秋田県湯出野遺跡、16. 北海道大船遺跡、17. 岩手県浜岩泉Ⅱ遺跡、18. 岩手県高無遺跡、19～24. 青森県明戸遺跡、25. 北海道大麻3遺跡、26. 岩手県宮沢遺跡－1～26 : 小野「縄文土偶と祭祀」「原始・古代日本の祭祀」より－

研究紀要 第27号

2013

平成25年3月25日 印刷

平成25年3月29日 発行

発行 公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 関東図書株式会社